

日本と台湾の親子関係に関する諺の対照比較研究

伍 維 誼
浮 田 三 郎

1、はじめに

1-1 本研究の目的

諺の世界をのぞいてみると、日本でも台湾でも、親子関係をめぐる事象は実に多く現れており (cf. 金子 1983, 浮田 1987)、かつ表現の底辺には今日の親子関係の根源となるものが潜んでいる。

台湾では、親子関係について阮昌銳 (1988) は「台湾社会は親子関係を重んじる社会であり、父子関係を中心に築いてきたものである。諺は地域民間文化を反映し、社会的な教訓の意義が有する。親子関係に関する諺は各家族の共同の家訓である」と述べている。したがって、親子関係に関する諺は家族という社会の最小単位で共同の規範となっていると言える。また、日本には儒教思想から仁、義、礼などと共に「孝」が重要な徳目として入った (綾部裕子 1993)。「百善孝為先」という儒教思想も昔から台湾社会に影響を与えていると思われる (阮昌銳 1988)。つまり、儒教思想を受容している日本と台湾では、「親子関係」が人間関係の中で重要な位置を占めていると考えられる。

そこで、本稿では、親子に関する諺が様々な人間関係の下で形成されたものという点を抑え、諺が育まれた日本と台湾の風俗、文化、民衆の考え方を考慮し、諺の表現の共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

1-2 諺の分析資料

本研究の対象として取り扱うのは、日台両言語における親子に関する諺である。まず、本研究では、台湾の諺の用例は『福全台諺語典』(徐福全 1998) を資料母体とし、さらに、考察の際には必要に応じて、『台湾俗諺語典』(陳主頭 2000) や『台湾のことわざ』(陳宗頭 1994) を参考にする。

一方、日本の諺の用例は『故事俗信ことわざ大辞典』(小学館 1982) を資料母体とし、さらに『日本のことわざ』(金子武雄 1982) を参考に扱うことにする。

分析方法としては、日本と台湾でよく知られている諺辞典から「親子」に関する諺を取り上げ、それぞれの諺の意味内容と表現を対照比較する。本稿では、「親」の「子」に対す

る関係の観点また「子」の「親」に対する観点から、日本語と台湾語の諺対照比較を試みる。

2、「親子」に関する日本語と台湾語の諺対照比較

2-1 「親」の「子」に対する関係

諺の多くは子を思う親、子のために苦勞する親などを題材とした諺である。

(1) 養兒防老の考え

J1「子有れば万事足る」

J2「泣いて育てて笑うてかかれ」

T1「有子万事足」(子有れば万事足る)

T2「養兒待老 積穀防饑」(子供を養って老後の計をなし穀物を蓄えて飢饉に備える)

T3「養兒防備老 種樹圖陰涼」(兒を養って老に備え樹を植えて涼しき蔭を図る)

T4「有囡傍子勢 無囡做到死」(子があれば子の運勢によって生きる、子がなければ死ぬまで働く)

T5「有囡的人散會勿久 無囡的人富會勿長」(子が有る人は貧しい時期は長くない、子が無い人は豊かな時期は長くない)

J1 と T1 は表現的にも意味内容もまったく同じである。『故事・俗信ことわざ大辞典』によると、この諺の出典は「無官一身輕、有子万事足」(蘇軾—賀子由生第四孫斗老)である。いわゆるこの諺はもともと中国から日本にも台湾にも伝来してきたものであると言っているであろう。J1 と T1 は日台に共通の子供の有無についての考え方だと言えよう。ここで注目したいのは、T2、T3 のように、昔の台湾社会では老後に備えるため子供を養うという考えが人々の中で根づいていたことである。現代の老人福祉施設のようなものがないため、子供を養わないと年老いて孤独で死ぬようになってしまう、という功利打算の行為を垣間見ることができる。ここには儒教思想の影響も及んでいると考えられる。例えば、T2、T3 である。

また、T4、T5 は T2、T3 と表現的にも内容的にも相違しているが、T2、T3 で表される功利行為の考え方とよく対応している。つまり、T4 と T5 は子を持てば親は年取っても世話をする人がいるのに対し、子が無ければ一生働かなければならない。さらに生活が豊かであっても長く続かないという子のある人の心強さが語られている。

一方、J2 の「泣いて育てる」のも、年取ってから「かか」るためのものならば、功利打算の行為だということになるかもしれないが、現実はその割り切られているものではない。親が子を育てるのは純粹の愛情が主だが、同時にやはり、のちにはこの子が頼りにもなるという心の働くことも多いのである。それが自然の情というものである。もっとも、この諺の背後には、親は子のためにそのいっさいを捧げ、その代わり、老後には子に養われるという、古来の家族制度がある (cf. 金子 1982, p271)。

(2) 子持ちへの仏教の影響

J3「親子は一世夫婦は二世主従は三世」

J4「子は三界の首枷」

T6「有因有因命 無因天注定」(子供を持つ運があれば子供に恵まれる、子供がなくとも天の意志である)

T6 が表わすように、子供を有することは天の命によって支配されており、これは人間の努力では変更し得ないという宿命論が語られている。伝統的な保守的な農業社会では、人々は天の力に逆らうことができないという消極的な考え方を持つため、こういう悲観的な、自ら慰めるような諺が現れるようになったと言える。簡は、「台湾語の諺の中で、『運命』に関する題材は多い。ここから、台湾人に対し、人間の一生において、一切の出来事はあらかじめ決定されており、なるようにしかならず、人間の努力もこれを変更できないという『宿命論』は、昔の庶民の生活や考え方に深く影響を及ぼしていたことが明らかになる」(1995, p211) と述べている。

J3 は親子・夫婦・主従という三つの関係を現実にとみると、一番縁の深いのは何と云っても親子であり、次が夫婦、三番目が主従という順である。ところで、飯塚は、「このことわざは、まったく逆の順序で言っている。もともとは関係の薄いものほど、その結びつきには深い縁がある、という仏教での方便の考え方に由来したものであるが、主従の関係を最も重んじ、また、父より夫につくという武家社会の思想に合致したため、封建時代に意図的に強調されたものである」(1997, p4) と述べている。また、J4 の三界は「仏教の世界観では、生きとし生けるものは、欲界・色界・無色界の三つの世界を前世・現世・来世の三世にわたって輪廻するとされている」(同, p5) というものである。ここには、仏教の影響が日本の庶民の考え方に及んでいることが示されている。

(3) 性別：男女に対する観点

J5「女の子に学問はいらぬ」

J6「女の子なら踏みつぶせ男の子なら産み落とせ」

T7「查某团仔人 捻頭飼也會活」(女の子はいい加減に養っても生きる)

T8「嫁查某团較慘著賊偷」(娘を嫁がせるのは泥棒に会うよりも惨めである)

J5、J6 と T7 には「男尊女卑」という考えが見られる。父系社会または農耕社会の日本と台湾では、男の子の労働力は重んじられており、女の子を養っても将来家を出て、夫の家に行き行って仕えるため、女の子の地位は低かったと思われる。T8 では、女の子が実家からいろいろなものを持って嫁に行くありさまを「泥棒」に喩えて表現している。

(4) 養子

J7「養子と粉搗きは笑っても飛ばす」

J8「生みの親より育ての親」

T9「家雞拍著團團轉 野雞拍著滿天飛」(自分の鶏は打ってもその地でぐるぐる回る、

よその鶏は打ったら飛び出す)

T10「生的請一邊 養的恩情卡大天」(生みの親より育ての親の恩が天より高い)

J7 と T9 の対応は、内容的には見事に一致しているが、使用されている素材の違いは、興味深い。特に台湾語では鶏が比喩的に使用されているが、これは農耕社会であった台湾では鶏を家の前で飼うのが一般庶民の習慣であったため、鶏などの家畜は親しみ深く、しばしば諺に現れると考えられる。また、J8 と T10 は表現形式も内容的にも対応している。台湾語の諺の社会的教化機能として、T10 が表すように、養子は養父母に感謝の気持ちを持つべき、実の両親のように親孝行しなければならない、逆らったら天罰がくだるという天意輪廻の考え方が働いている。

(5) 継子・継母

J9「夏の蕎麦は継子にやれ」

J10「我が子は豆の上に遊ばせろ継子は蕎麦の上に遊ばせろ」

T11「春天 後母面」(春の天気は継母の顔)

T12「前人团 母敢食後母奶」(先妻の子継母の乳を飲むのを敢えてせず)

両語それぞれの対応例は見当たらないが、日本語の方は「継子」の憐れに、台湾語の方は「継母」の怖さに重きを置いた表現が面白い。特に J9、J10 の「蕎麦」の使用は、日本のと言える。中国・朝鮮から日本に渡来した「蕎麦」が古くから日本の文化の一員となり、日本の諺に使用されていることは興味深い。

(6) 末っ子

J11「乙子の十五は家蔵建てる」

T13「父母惜細子、公媽惜大孫」(父母は末っ子を愛し祖父母は長孫を愛す)

T14「娘 惜細子」(母は末の子を可愛がる)

両語の諺とも末っ子を可愛がる傾向が見られる。長男は家業を継ぐ、末っ子は甘やかしてもらおうという解釈も含まれている。T13、T14 のように、親は末っ子を可愛がるのが宇義通り表現されるのに対し、J11 は家蔵を建ててやるということでそれほど末っ子が可愛がられることを表現する。

(7) 子供の良し悪し

J12「鳶が鷹生む」

J13「堯の子堯ならず」

T15「歹竹出好筍」(悪い竹からよい竹の子ができる)

T16「好母生好团 好稻出好米」(良い母は良い子を産む、良い稲は良い米ができる)

T17「好竹出痢脛」(良い竹から悪い竹の子ができる)

J12 と T15 はよく対応しているようである。日本語では鳶と鷹という動物が比喩的に使用され、台湾語では竹と竹の子という植物が使用されている。T16 も米を用いて対偶表現形式で表現される。ここには台湾の農耕社会の庶民生活に親しまれていたものが見える。

一方、J13 と T17 は比喩の対象は異なるが、内容的にも表現から受ける印象もよく似ている。J12 と T15 は子が親より優れていることに対して子を褒める時に用いられ、J13 と T17 は親の嘆きを慰めたりする時にも用いられる。

(8) 苦勞・親馬鹿

J14「我が子の悪事は見えぬ」

J15「母が痩せると子が太る」

T18「父母無嫌 困無 困無嫌 父母散」(父母は子供のブスを嫌がらず、子供は父母の貧乏を嫌がらない)

T19「父母疼歹 困 皇帝愛奸臣」(父母は悪い子でも可愛がる、皇帝は奸臣が好き)

T20「老父扛轎 子坐轎」(親父は轎を担いで子供が轎に乗る－親が苦勞して子が楽をすること)

J14 と T18、T19 は、内容的に親は悪い子でもどんな子でも可愛がるという内容が含まれていて、相通じるものはあるが、必ずしも同じとは言えない。J15 と T20 は親の苦勞を描写している。台湾語では「輿かき」を用い表現するのが台湾的と言える。昔の台湾社会では嫁は輿に乗って夫の家に行く習慣のあったことに言及している。

(9) 若年出産

T21「三十不見子 終生磨到死」(三十歳になって子が未だいなかったら、一生涯死ぬまで苦しく過ごす)

T22「三十無子窮半百」(三十歳になって子供が未だいなかったら、)

T23「六十無孫 老來無根」(六十で孫がないのは、老いて根がないのと同じである)

若年出産に関する諺は、今回の資料では、対応する日本語の諺が見当たらない。この事実だけから判断すれば、若年出産のような考え方は台湾的であったと言えるであろうか。以上のように、若年出産という観念は昔の台湾社会では重要視されていた。これは(1)の「養兒防老」(子を養って老に備え)という考えと対応している。その理由は、年を取って子が生まれたら、老後の生活の保障はないと恐れており、あるいは、老衰になって幼児を養う体力がないことへの恐れが挙げられる。

(10) 嘆き

J16「親の心子知らず」

J17「子はあるも嘆き無きも嘆き」

T24「會生 困兒身 勿會生 困兒心」(子供の体は生む事は出来るが、子供の心は生むことが出来ぬ)

T25「父欠 困債 翁欠 某債」(父は子に負債がある、夫は妻に負債がある)

T26「無冤無債 不成父子」(恨みや借金がなければ、父子になれぬ)

J16 と T24 から日台のそれぞれの親子関係の事象が見られる。J16 は「親の深い愛情と思慮とに立脚した意図を理解せずに、これにそむいて勝手気儘なふるまいをする者は多い」

と暗示し、T24 は「いくら親子といっても、子の心や行為など理解させてくれない」という親の嘆きが如実に語られている。もう一つ興味深いところは T25、T26 である。台湾の親はよく「前世子供に負債があったため、今世借金を返してもらいに我が家に生まれてきた」と嘆く。こういう親子関係を「債権」「債務」関係に喩える表現は台湾的と言える。これを「因縁の債」と陳昌閩は指摘した（陳昌閩 2001, p108）。これは一種の天命思想であり、災いと福の訪れることは天意が定めるといふ仏教思想が信じられていたと思われる。

(11) 子供の数

J18 「足らず余らず子三人」

J19 「負はず借らずに子三人」

T27 「一人三子 六代千丁」（一人に三人の子があれば六代目には千人の多きに達する）

T28 「多子多扒腹 多媳婦多体拖」（子供多ければ心配多く、養女多ければ紛擾多し）

J18、J19 に見られるように、日本の子供の数については「三」という数字がよく現れており、T27 と共通している。また J18、J19 には「子が無かったり、老後が思いやられて心細いが、反対に子供が多すぎたら、これもまた地獄である」（金子 1982, p89）という概念が潜んでおり、T28 とよく対応している。昔の庶民の幸福な家庭の理想がここから窺える。T28 に意味が近い諺には「多田多兒多冤家」「多田餓死爸」などがある。

2-2 「子」の「親」に対する関係

親を思う子、親のために苦勞する子などを題材とした諺も多く見られる。

(1) 親孝行・親不孝

日本の親孝行

J20 「親の恩は山より高く海より深い」

J21 「親の恩は子でおくる」

J22 「親には一日に三度笑うて見せよ」

日本の親不孝

J23 「孝行したいときには親は無し」

J24 「墓に布団は着せられぬ」

J25 「石に布団は着せられず」

台湾の親孝行

T29 「百善孝為先」（百善は孝が先）

T30 「爸母著孝順 兄弟著協和」（親に孝行せよ、兄弟は協力せよ）

台湾の親不孝

T31 「飼某飼到肥律律 飼老母飼到剩一支骨」（妻を太く養って、母を骨が見えるほど瘦せる）

T32 「飼子無論飯 飼父母算頓」（子供を養うには米のことは少しも構わないで父母を

養うには一食幾何と勘定する)

T33「不孝生困免歡喜 忤逆元生忤逆兒」(親不孝者は喜ばないで、親不孝者は親不孝者を生むはず)

T34「草索拖阿公 草索拖阿爸」(縄でおじいさんが縛られ、縄でお父さんは縛られる)
親孝行に関する諺では、J20、J21のように、日本語の方は親の恩を強調しているのに対し、T30では台湾語の方は孝行という行為の重要性が重んじられている。

一方、親不孝に関する諺では、日本語の方は、親が死んでからの後悔の気持ちを代弁するものとして用いられているようである。特に「石」「墓」は死を物言わぬ冷たいものとしてよく表しており、「布団を着せる」は、庶民のいたわりのさまをよく表している。一方、台湾語の方は、「食べる」ことを強調している。親孝行と言わなくとも、親に基本的な食事すら困らせることは一番の親不孝であると言い伝えている。ここでは、発想の違いにもかかわらず同じ結論に至る諺の妙を見ることができる。もうひとつここで注目したいのは、T33、T34である。自分の親に孝行でない者はいつか自分にも親不孝される可能性がある、という因果応報の考えでもある輪廻思想が言い伝えられている。

以上のように、「親孝行」に関する諺が「親不孝」に関する諺より少ないという現象は日台では共通している。それは、親の子に対する慈愛は親が自分の生命に続く本然的な感情であるのに対し、子の親に対する「孝行」は自分の生命の根源を遡る自覚的な過程であるからであろう。このため、親の愛は子からの自覚的な通じ合いや応えを得ないままで、さらに、子は絶えず成長し親から離れ独立した個人になるまでの過程の中で、親の深刻な感触が直接諺に反映されている。いわゆる、親の子の不孝に対する嘆きや訓戒などが、上で取り上げられた「親不孝」に関する諺に反映されている。

(2) ありがたさ

J26「せつない時は親」

J27「川中に立つても親の脇の下は香ばしい」

J28「親と月夜はいつもよい」

T35「倚父亦食 倚母亦食」(父母に依って生活している)

T36「父業子掌 父債子還 子債父不知」(父の財産は子が譲り受け父の負債は子が返す子の負債は父知らず)

表現と使用されている比喩的素材は異なっているが、内容的には相通じるものがあるようである。T32とJ27では、親のありがたさに言及している。また、T36では親のありがたさだけでなく、時には子供に負担があるという親子関係も語られている。T36では父子関係を「債権」「債務」関係に喩える表現が再び見られる (cf. 2-1- (10))。

(3) 信頼

J29「虎も我が子は食はぬ」

J30「馬鹿な親でも親は親」

T37「天下無不是的父母」(世の中に悪い親はない)

T38「虎永無咬困之理」(虎も我が子は食はぬ)

両言語とも「虎」という素材が使用されているが、日本の虎は中国由来であろう。恐ろしい猛獣でさえ子をかわいがるということから転じて、親は子供に害することはしないため子供は親のことを信じるべきであると暗示している。

(4) 指導：子供の方が指導的立場になることもある。

J31「老いては子に従え」

J32「負うた子に浅瀬をおしえられる」

J33「三つ子に習って浅瀬を渡る」

T39「查某子 教娘奶斷臍」(女の子が母に臍の緒を切る事を教える)

これらは「親」「子」という素材を使用し、普段相手にもしないような年少者などから、ふとした機会になにかと教えられることもある、という教訓が指摘されている。そして、J31では、老いてしまっは成長した子に頼ることになるとも言っている。

3、両語の考え方と比喻表現

3-1 両語に見る考え方

両語の諺に現れる考え方を簡単に表にまとめると次のようになる。

表1「親子」に関する両語の諺に現れるそれぞれの庶民の考え方

	仏教の考 え	功利的な 考え	男尊女卑 の考え	親の愛	親孝行	親不孝	子供の指 導役
日本語	J3 J4		J5 J6	J11 J14 J15 J16 J17 J26 J27 J28 J29 J30	J8 J20 J21 J22	J23 J24 J25	J31 J32 J33
台湾語	T6 T25 T26 T33 T34 T36	T2 T3 T4 T5 T21 T22 T23	T7 T8	T13 T14 T18 T19 T20 T24 T35 T37 T38	T10 T29 T30	T31 T32 T33 T34	T39

表1から男尊女卑の考え方、親の愛、親孝行、親不孝は共通によく見られるが、仏教の考え方と功利的な考えは台湾によく見られ、子供の指導役に関しては日本の方によく見られる。

以上2で項目別に分析してきたように、民衆生活の異なる文化背景と生活風土の中でそれぞれ生まれてきた諺の表現手法が相違していることも見られる。

まず、人間の一生において、一切の出来事はあらかじめ決定されており、なるようにしか

ならず、人間の努力もこれを変更できないという「宿命論」が、日台では昔の庶民の生活や考え方に深く影響を及ぼしていたことが見られた。子供の数でいうと、「三人」の子がいれば何よりであり、父系社会である日本と台湾では「男尊女卑」の考え方が昔から根づいている。同時に、養子より実の子の方が大切であるということは両語の諺の共通点である。また、天意思と天意輪廻という仏教の影響も日台の人々の考え方に見られる。「親子」関係において、宿命論や仏教の考えなど取り込まれた諺がよく見られる。

さらに、両語の諺とも「子を養って老後に備える」という考え方を見ることができる。特に、台湾語の諺では、老後に備えるために子を有することが基本的なことであり、後継ぎの男の子を生めば何よりであり、若年で子を持てば一生の保障ができることになり、さらに、良い子に成長してもらえば、老後には楽な日々が過ごせるという庶民の望みは、相対的な功利行為と結びついていると考えられよう。

また、「親孝行」に関する諺が「親不孝」に関する諺より少ないという現象も日台で共通している。

相違点としては、親子関係を「債権」「債務」関係に喩える表現手法が台湾的ということが言える。さらに、現世は父子になれることも前世の債務を返すためであるという考えも台湾語の諺において強調されている。このように、人間関係の中でもっとも基本的な「夫婦関係」と「親子関係」は前世、現世という仏教の考えに基づいていることも見られる。

3-2 比喩表現

さらに、両語の諺の表現法で興味深いところは、比喩素材としての動植物の使い方である。

表2「親子」に関する両語の諺における比喩表現の素材

	動物	自然的なもの(植物を含む)
日本語	鳶(J12)鷹(J12)虎(J29)	蕎麦(J9, J10)豆(J10)石(J25)川(J27)月(J28)
台湾語	鶏(T9)虎(T38)	竹(T15, T17)筍(T15)稲(T16)米(T16)

表2では、台湾語の諺では鶏や豚などの家畜が比喩の素材として使用されている。これは、台湾では鶏や豚など家で飼うのが一般庶民の習慣であったため、鶏などの家畜は親しみやすく諺に現われると考えられる。しかし、同じ農耕社会であった日本では、家畜が比喩の素材として「親子」関係についての諺に用いられていることは、今回の参考資料では見当たらない(cf. 浮田 1989)。また、素材「虎」の使用は両語で共通しているが、これは中国の影響を受けていると考えられる。

また、自然的な素材については、日本語の蕎麦や豆の使用と台湾語の筍や米の使用に、日台のそれぞれの庶民の食習慣をも見ることができる。このように、民衆生活の異なる文化的背景と生活風土の中でそれぞれ生まれてきた諺は、同様な概念を主張するのに、両語の諺の

言語発想あるいは比喩表現の違いに基づき、興味ある表現法を見せてくれる。

4、おわりに

以上、日本と台湾の諺では、仏教と儒教の影響の微妙な違い、比喩表現の違い、宿命論や功利打算の考え方の違いなど興味深い点も指摘できた。また、表現の内容からみると、日本でも台湾でも、「親」は「子」を育てるのは純粋な愛情が主で、「子」に対する愛情が深ければ深いほど、「子」のことについての喜びも悲しみも深いということは共通している。また日台では、親の子を思う心が、きわめて自然に諺となって指摘されているのに対し、子の親を思う心を指摘した諺が、ほとんどなく、僅かに教訓としてあるだけなのも、現実には、子を思う親の心に比べて、親を思う子の心が低いからなのであろう。そして、諺の機能としての教訓的機能、伝承的機能は「親子関係」の様々な内容を表現することで果たされるのであり、風刺や皮肉、切り返し、強調、確認等の機能もそうしたプロセスで機能している。

参考文献

- 綾部裕子・プラサート・ヤムクリフク（1993）、「諺の日タイ比較—親子と女について—」『言語文化論集』第37号、筑波大学現代語・現代文化学系 pp. 43-48
- 飯塚正雄（1997）、『ことわざ人生論』創元社
- 浮田三郎（1987）、「日本語とビルマ語の諺対照比較研究（2）—日本語・日本文化のめの教材基礎研究—」、『広島大学教育学部紀要』第2部 No36 広島大学教育学部 pp. 301-312
- （1989）、「日本語とギリシア語の諺対照比較研究（4）—諺の中に使用された素材「動物」（1）—」、『広島大学教育学部紀要』第2部 No38 広島大学教育学部 pp. 287-293
- 金子武雄（1982）、『日本のことわざ 評釈』
- （1983）、『日本のことわざ 続評釈』大修館書店
- 阮昌銳（1988）、『傳薪集』臺灣省立博物館
- 尚学図書編集（1982）、『故事・俗信ことわざ大辞典』小学館
- 徐福全（1998）、『福全台諺語典』国家図書館
- 陳宗頤（1994）、『台湾のことわざ』東方書店
- 陳主頤（2000）、『台湾俗諺語典 卷5 婚姻家庭』前衛出版社
- 簡正崇（1995）、「台湾閩南諺語研究」逢甲大學文理學院中國文學研究所論文
- 陳昌閩（2001）、「台灣閩南諺語之社會教化功能研究」南華大学文学研究所論文